

スポット企画展

新収蔵資料展

会期：令和 4 年 12 月 1 日～令和 5 年 2 月 14 日

近年収蔵された資料から厳選し、①木村弦三と石坂洋次郎 ②石坂洋次郎原稿「母の自画像」 ③棟方志功と高木恭造 ④詩人・福士幸次郎 ⑤秋田雨雀と森鷗外 ⑥詩人・秋田雨雀 の 6 つのテーマに分けて紹介した。

▶ 〈木村弦三と石坂洋次郎〉より 石坂洋次郎書額「りんごの大源」(木村弦三旧蔵)

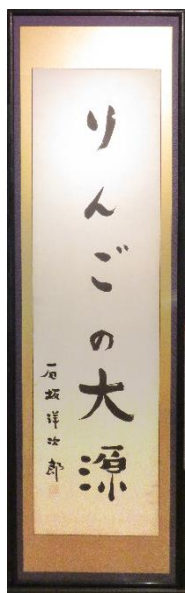
木村弦三(明治 37 年～昭和 53 年)は、弘前市土手町に呉服商の長男として生まれた。大正 11 年、日本大学芸術学部を中退して帰郷。石坂洋次郎らと「弘前マンドリン倶楽部」を創設する(のち、マンドリナータ・ディ・ヒロサキと改称)。翌 12 年、福士幸次郎が提唱する「地方主義」に共鳴し民俗音楽の研究に取り組む。郷土の音素材を中心とした作品を次々と作曲・演奏し、マンドリン曲・管弦楽曲・合唱曲など 150 曲に及ぶ作品を残した。

大正 10 年、近所に住む五歳年上の石坂洋次郎が慶應義塾大学に入学し、慶應マンドリンクラブに入部。その夏、帰省した石坂が弾いたマンドリンの音色に魅せられ、弦三はマンドリンの奏法と作曲技法を独学で習得した。のちに石坂は、親交のあった弦三の店「大源」(林檎移輸出問屋)のために直筆の看板「りんごの大源」を製作して贈った。なお石坂は「中学時代に、習字の先生から愛想をつかさされたほどの天性の悪筆」(「柿ひとつ」と書くほど字が下手で、色紙の揮毫などは大の苦手であった。

▶ 〈詩人・秋田雨雀〉より 秋田雨雀短冊「日二十日ひげ三寸伸びたり夏ごもり 幽閑生活にて」

秋田雨雀(明治 16 年～昭和 37 年)は、黒石町(現・黒石市)生まれの劇作家、童話作家、詩人。明治 35 年、東京専門学校(早稲田大学)英文科入学のため上京。堺利彦、幸徳秋水ら社会主義者の演説に啓発され、国家や平等などについて真剣に考えるようになる。『新思潮』を端緒として小山内薫らと交流、数多くの戯曲を生み出す。その活動は幅広く、プロレタリア児童文学の先駆ともなる。劇作家、舞台芸術家としての一面も見せた新劇運動やエスペラント運動でも活躍し、このほか数多くの詩、小説、童話、随筆、評論などを書き、明治・大正・昭和を幅広い活動で駆け抜けた。

展示では、秋田雨雀短冊「日二十日ひげ三寸伸びたり夏ごもり 幽閑生活にて」を紹介。これは昭和 8 年 9 月 9 日の日記に書かれている句と同じものである。8 月 21 日、雨雀は共産党のシンパ運動に参加したという理由で目白署に出頭を命じられ、9 月 14 日まで留置されていた。このほか、「手記を書く縛めの手を初嵐」「ひばの葉のかげは静かにうつれども四角なるこの壁けふも出られず」などを留置所で作った。



◆新資料紹介 鎌田慧原稿

先頃、ルポライターの鎌田慧氏(弘前市出身)より貴重な資料が多数当館に寄贈された。その中から「椎の若葉に光あれ - 葛西善蔵の生涯-」の原稿を紹介する。

これは、『群像』(平成 5 年 8 月号)に掲載されたもので、鎌田氏が「『人を知りたい』願いの地点から、葛西善蔵の生涯をたどってみたい。ひとのことを書くのは、つまりは自分を知りたいがためだが、いわばおのれのイメージをつくりあげ、それに合わせて自滅した善蔵の浮ぶ瀬といったようなものを見極めたいのである」との思いで執筆した作品である。



◆ミニ企画 石坂洋次郎

期間：令和 5 年 4 月 1 日(土)～9 月 24 日(日) 場所：2 階 石坂洋次郎記念室

弘前市の文学碑 4 基と秋田県横手市の文学碑 1 基、それぞれの碑文の引用元となる小説・エッセイを紹介している。

「物は乏しいが空は青く雪は白く、林檎は赤く、女達は美しい國、それが津軽だ。私の日はそこで過され、私の夢はそこで育きました。」(弘前市りんご公園文学碑／『わが日わが夢』あとがきより)



お知らせ

〈文学忌〉

弘前ゆかりの作家 11 人の各忌日に行い、忌日を含め約 1 週間その作家の特別展示をロビーで開催します。忌日は無料開館日とし、講話(弘前文学会・後藤隆氏)と朗読(林本恵美子氏)があります。(6 月 3 日、9 月 2 日、10 月 7 日はラウンジのひととき開催日のため朗読と講話はありません。)

平田小六…5 月 18 日 佐藤紅緑…6 月 3 日、 太宰治…6 月 19 日、
葛西善蔵…7 月 23 日 陸羯南…9 月 2 日、 一戸謙三…10 月 1 日、
石坂洋次郎…10 月 7 日 福士幸次郎…10 月 11 日 長部日出雄…10 月 18 日、
高木恭造…10 月 23 日 今官一…3 月 1 日

北の文脈ニュース 第 88 号

Kitano bunmyaku news

第 47 回企画展

小説「花はくれない」 - 佐藤愛子が描いた父・紅緑 -

会期：令和 5 年 4 月 1 日～令和 6 年 3 月 21 日

佐藤愛子著『花はくれない 小説 佐藤紅緑』(昭和 42 年)は、父・佐藤紅緑の波乱に満ちた生涯を、娘の眼から赤裸々に描いた感動の長編である。佐藤紅緑は、明治 7 年、現在の弘前市生まれ、俳人・劇作家・小説家としての道をあゆみ、のちに「あゝ玉杯に花うけて」などの少年小説の大家としてその名を残した。本展は、佐藤愛子の生誕 100 年という記念すべき年にあたり、佐藤紅緑の 74 年の生涯と文業を、名作『花はくれない 小説 佐藤紅緑』の文章でたどり紹介するものである。

紅緑の文業は俳句に始まる。明治 27 年、陸羯南の日本新聞社に入社し正岡子規と出会った紅緑は、子規から「紅緑」の俳号をもらい、高浜虚子、河東碧梧桐、石井露月と並び門下の四天王に数えられるまでになる。子規は紅緑の中に「技巧と滑稽の才」があることを見ていた。

明治 30 年代、紅緑は政治家を目指して各地の新聞社を転々としながら俳句関係の著書を次々と刊行。やがて、小説を書くようになる。39 年『中央公論』に発表した小説「あん火」は自然主義風の作品で文壇から注目された。同じ頃、新派の名優・高田実の依頼で書いた脚本「俠艶録」が本郷座で大成功を収め、一躍新派の人気劇作家となる。

明治の末頃から紅緑は大衆小説に転じ、「光の巷」「鳩の家」「虎公」など大正の 15 年間で新聞に連載した小説は約 30 編を数え、たぐいまれなストーリーテラーとして人気作家の地位を築いていく。大正 10 年から東京毎夕新聞に連載した「大盗伝」は、同紙の発行部数を 16 万部から 32 万部にはねあげたという。

佐藤愛子が生まれたのは大正 12 年 11 月、関東大震災の 2 ヶ月後のことである。この年、紅緑は外務省の情報局嘱託として外国の映画研究という名目でヨーロッパに外遊。草創期にあった日本の映画界に新しい道を開拓する目的があった。紅緑原作の映画は明治期のものから数えて 70 本を超えるが、関東大震災や第二次世界大戦の災害などでその大半が失われた。

昭和のはじめ、同郷の『少年倶楽部』編集長・加藤謙一の懇願により、紅緑は少年小説の執筆に向かう。昭和 2 年、第一作目「あゝ玉杯に花うけて」の連載を開始するや読者の熱狂的反響を呼ぶ。紅緑は「紅顔美談」「少年讃歌」などの〈熱血小説〉を次々と執筆し、『少年倶楽部』は黄金期を迎える。

やがて戦時色が濃くなる中、紅緑は小説の執筆を絶ち、もっぱら俳句に身をゆだねる。昭和 18 年、句集『花紅柳緑』を古稀の記念に刊行。昭和 24 年 6 月 3 日、長男のサトウハチローが詩人として脚光を浴びる中、74 年の波乱に満ちた生涯を閉じる。

以上のような華々しい文業に、家族の過酷な運命を絡ませ、ひたむきな激情に生きた父・紅緑の生涯を描いた『花はくれない 小説 佐藤紅緑』。佐藤愛子はその巻頭に、紅緑の日記から拾った次の言葉を置いた。「人は負けると知りつつも、どうしても戦わなければならない場合がある - バイロン」

本展の開会式で挨拶に立った紅緑の姪・佐藤きむさんは、前日に愛子さんが電話で語った父・紅緑とのユーモアあふれる思い出話を披露。愛子さんが命名した「荒ぶる血」の代表であった紅緑に、ユーモラスで優しい一面があったことを展示の中から探したい、と結んだ。本展では、次ページ掲載の直筆資料をはじめ約 200 点の資料を展示(展示替えも含む)。紅緑の単行本 80 余冊を一覧にしたタペストリーや文学ビデオも必見である。

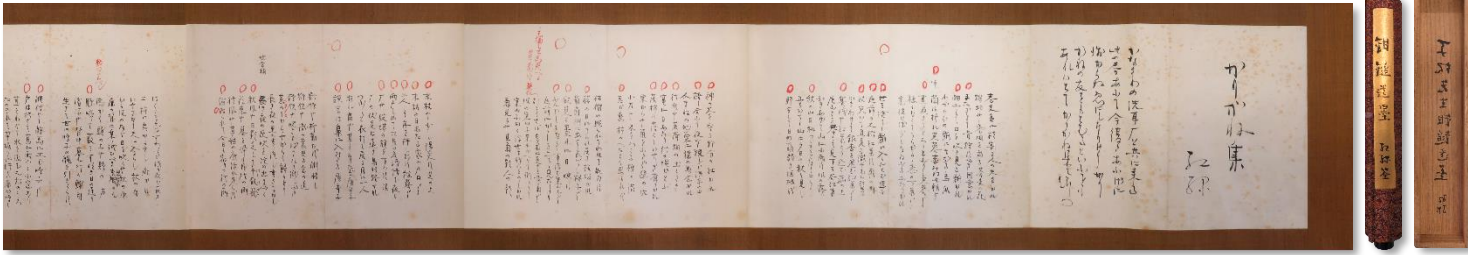


開催初日の様子

第 47 回企画展

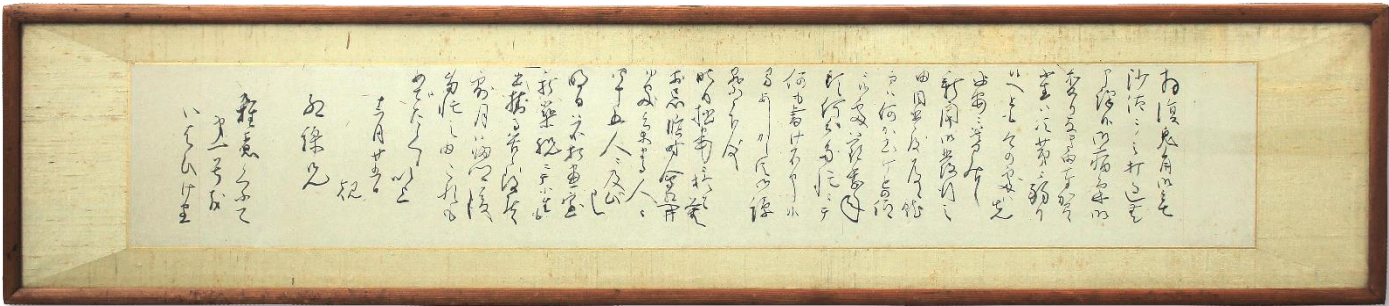
小説「花はくれない」 —佐藤愛子が描いた父・紅緑—

資料紹介



句稿「子規先生鉗鉗（けんついで）遺墨」

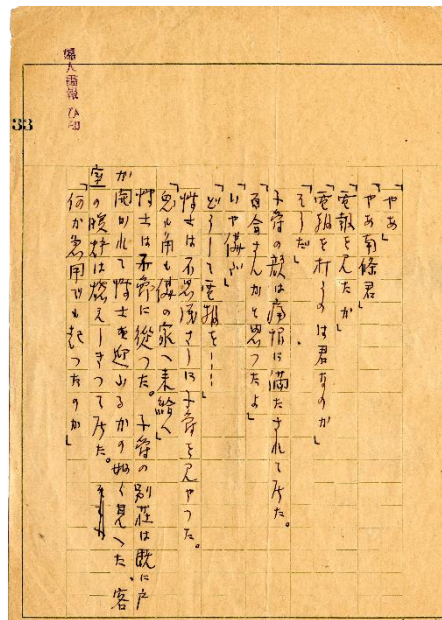
明治 31 年 10 月の紅緑の句稿「かりがね集」に、子規が朱で評点・評語を加えたもの。子規は巻末に総合的な句評と近況、11 月 24 日の日付を書き記している。本句稿は『俳諧紅緑子』（明治 37 年）に、「俳三年」と題する紅緑の句稿の一つとして、「かりがね集」の名で収められている。「俳三年」は、明治 29 年から 31 年にかけての 3 年間、紅緑が子規と同人諸氏に句稿を提出し批点を乞うた俳句修行の記録。「俳三年」の修行は、病のため帰郷していた紅緑が再び上京した 29 年 2 月、根岸・子規庵の句会で自分の句に 1 点も入らなかったことに起因する。子規 31 歳・紅緑 24 歳、「新俳句」の勃興・隆盛期の息吹を伝える貴重な資料である。昭和 15 年春、「子規先生鉗鉗遺墨」は紅緑から門弟の伊藤葦天に譲渡された。個人蔵



正岡子規書簡 佐藤紅緑宛

明治 32 年 12 月 25 日付

明治 32 年 4 月、病のために富山日報社を退社した紅緑は弘前に帰郷し、5 月に俳句結社「太平会」を結成。新聞『陸羽新報』の発刊を計画して子規に寄稿を依頼する。この書簡はそれに対する返事である。子規は紅緑の病気を気遣い新聞の発行を祝うが、「節季年頭何分多忙」のため寄稿できぬことを詫び、書簡の最後に「雑煮くふて第一号をいはひけり」の一句を添えた。子規は、蕪村忌臨時会、中村不折の画室新築祝い、帰郷し医師となった石井露月の多忙などの近況も伝えている。『陸羽新報』は長続きせず、紅緑は、報知新聞社、福井新聞社、萬朝報社、大阪関西日報社などを渡り歩くことになる。



原稿「春を追ふて（十一）」

長編小説「春を追ふて」は、大正 13 年 3 月から 14 年 2 月にかけて『婦人画報』に連載された。大正期、紅緑は新聞・大衆雑誌・婦人雑誌を舞台に次々と長編小説を連載したが、その後期の作品である。『明治大正文学全集』第 19 卷（春陽堂・昭和 4 年）に柳川春葉「生さぬ仲」とともに収録された。「春を追ふて」は、相場師の妾の子・明子と本妻の子・百合子に文士の徳郎（明子の母の甥）、女学校時代の同級生ら加わり、波乱の人間ドラマが展開される。愛欲・芸術・自由・道徳などをテーマに人としての生き方を問う。本稿は、物語が急展開し結末へと向う部分にあたる。全 7 枚。

〈小説「花はくれない」 —佐藤愛子が描いた父・紅緑—〉に寄せて

佐藤愛子さんは、昨年の 11 月 5 日で、満 99 歳を迎えたが、驚くのは、その 2 ヶ月前に『幸福とは何ぞや』を刊行していることである。すなわち愛子さんは、いまなお現役なのだ。しかも立て続けに単行本を刊行しているではないか。

たとえば、本書を刊行した 9 月には『ああ面白かったと言って死にたい』を出版している。月 2 冊の出版は、どれほど厳しいものか、当方には想像も付かない。

それだけではない。一昨年には『九十八歳。戦いやまず日は暮れず』を刊行しているが、これが読者から圧倒的な支持を得たというのだ。すなわち刊行する作者のエネルギーにも圧倒されるが、それを買い求める読者が、非常に多いことにも驚いてしまう。

愛子さんの父、佐藤紅緑もまた「あゝ玉杯に花うけて」などの〈少年小説〉で、多くの読者を魅了した作品群を持つ。愛子さんが父親の影響を受けたことは容易に想像できる。こういうのだ。

—父の日記から「人は負けるとわかっていても戦わねばならぬ時がある」という言葉を拾った。私が 38 歳くらいの時で、それが、あの子の人生を決めたような気がするんです。言葉というのは、苦境にたったときじゃないとハートに入ってこな

いものですね。……

ところで愛子さんは、なぜ書くのかの問いに、こう回答している。

—作品を書くことで、人間についての発見というか、理解が深まるというか、私自身に何か付け加わるものがあるんです。それが、私にとって書くことの意味なの。……

繰り返しになるが、佐藤愛子は、なぜ作家をめざしたのか、その契機は何か。

—私は嫁ぎ先から姑の悪口を書いた手紙を父によく送っていたのよ。父はそれを読んで、「愛子の手紙は実に面白い。姑が活写されていて、ただの愚痴でないのがいい」ってね。父がそう言っていたことを、母が思い出して、それで勧めたんです。だから、私の出発点は悪口から始まっているのね。……

その小説「戦いすんで日が暮れて」が直木賞を受賞したのがきっかけで、各社から原稿依頼が殺到し、膨大な借金を返済することができたという。つまり、直木賞を受賞したがゆえに、生活が安定し、以後の作家生活が充実していくことになったというのである。

弘前ペンクラブ会長 齋藤三千政

スポット企画展

生誕 100 年 佐藤愛子展

会期：令和 5 年 4 月 15 日～令和 5 年 7 月 20 日

作家・佐藤愛子は、大正 12 年に佐藤紅緑とシナの二女として生まれ、今年、生誕 100 年を迎える。昭和 25 年、同人雑誌『文藝首都』に処女作「青い果実」を発表。44 年「戦いすんで日が暮れて」で直木賞を、54 年に『幸福の絵』で女流文学賞を受賞。平成 12 年、佐藤家の人々の「荒ぶる血」を描いた大河小説「血脈」で菊池寛賞を、27 年『晩鐘』で紫式部文学賞を受賞。ユーモラスなエッセイにもファンが多い。本展では、〈『血脈』への道〉から〈『戦いすんで日が暮れて』への道〉、そして〈その後〉にいたるまで、作家・佐藤愛子の波乱万丈の人生とよどみない筆の力の魅力を紹介。また、愛子の父・紅緑の故郷・津軽（弘前）への心情が書かれた色紙も展示した。

著作では、父・紅緑の溺愛と庇護のもとに育ち、多感な少女時代を描いた自伝小説ともいえる『愛子』。また『血脈』は、原稿用紙 3,400 枚にのぼり、12 年の歳月をかけて描いた一族の歴史である。平成元年 7 月の『別冊文藝春秋・夏号』より連載開始、平成 12 年 5 月に完結。愛子が佐藤一族に捧げた「鎮魂の書」である。そして、夫が作った借金を引き受けながら、子育てをし、文字通り「戦い」の真っ最中で第 61 回直木賞を受賞した「戦いすんで日が暮れて」も、自らの体験をもとにした小説。ほかエッセイも多数執筆。ユーモア小説・エッセイはロビー展で紹介した。



←左から

- 『愛子』現代社 昭和 34 年 3 月
- 第 61 回 直木賞受賞『戦いすんで日が暮れて』講談社 昭和 44 年 4 月
- 第 48 回 菊池寛賞受賞『血脈』文藝春秋 上・中・下：平成 13 年 1 月～3 月
- 色紙「生れ育ったわけではないのここは故郷だと思ふ津軽 佐藤愛子」